常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ　seasonⅡ

令和３年７月２９日(木)

◇ 一◆入魂

23 日に幕を開けた【2020 東京五輪】。
日本人選手の頑張る姿から、多くの人々が勇気をもらっていることだろう。

大会 6 日目終えた 28 日(水)現在、スポーツ大国のアメリカや中国をおさえ、何と日本がメダルランキングのトップである。
母国開催という後押しもあるが、気候を選手が知る屋外競技に利があるぐらい。無観客開催で、近親者をはじめとする声援もない中、日本人が大活躍している。映像を通した日本人選手の活躍する姿から感じるのは、「これほど日本人選手が精神的に強かったのか」ということ。日々の練習の中で積み上げられ、鍛えられた心の強さは、無観客という声援の後押しがない孤独の中でこそ発揮されるのだ。

ソフトボール上野選手や後藤選手の投球は、まさに【一球入魂】。投球するボールに魂が乗り移っているようだ。決勝戦最終回の上野選手の圧巻の投球然り、メキシコ戦、大ピンチでの後藤選手の投球然り。
ソフトボール競技で特に印象に残るプレーは、決勝アメリカ戦６回、１アウト１・２塁でのミラクルダブルプレーである。

打者が打った強烈なライナーが三遊間に飛ぶ。「やられた」と思った瞬間、三塁手の山本選手が反応する。グラブには収まらなかったが、打球が手首に当たる。後方にふわりと上がったボールに三遊間まで走り込んでいた渥美遊撃手のグラブが伸びる(２アウト)。そして捕るや否や体を反転させセカンドに送球。まるでダブルプレーを予感していたかのように市口二塁手がベースカバー。キャッチしてダブルプレー成立の３アウトチェンジだ。
この奇跡的なプレーを支えたのは、選手の精神的な部分だろう。山本、渥美、市口選手の守備は【一守入魂】、【一捕入魂】、【一繋入魂】、【一信入魂】とも言うべきか。さらに、後藤投手の【一球入魂】の投球があればこそのプレーだった。

勇気をもらうのは、日本人選手たちの【一◆入魂】のプレー。まだまだ五輪は続く。次はどんな【一◆入魂】を見せてくれるのか、楽しみでならない。